

# 音に対するイメージについて

保育者養成校で学ぶ学生が好む調性

柏瀬 愛子・小西由利子\*

## The Image of Sound

The Keys that Nursery School Students Prefer

Aiko KASIWASE and Yuriko KONISHI

### はじめに

このところ保育現場の状況は、新教育要領に示された基本的なねらい「豊かな感性の育み」という観点が重視されるようになりだした。そのため「音楽リズム」と称されていた頃とは、その指導法に変化が見られるようになっている。それは、子共の主体性を重んじた保育、すなわち「教え込み」をするのではなく、子どもが持っている力を「引き出す」方法を取ろうというもので、子どもが心に描いたイメージを大切にしたり、子どもの思うままに表出させることから感性を育てることをねらったものである。また、仲間とのコミュニケーションの取り方をはじめ、諸能力、機能の発達を促し、教育的なねらいの達成を目指そうというものでもある。

子どもの「感性を豊かに」と願うとき、人的環境となる保育者の感性が問われることは当然のことである。我々は、今までにも保育者となることを夢みて養成校で学ぶ学生達が持つ感性、特に音楽表現に関する内容についての調査研究をし、いろいろな角度から考察を深めていたが「(音=調べ) に対して、学生達がどのような感覚を持っているか」については、未だ調査してみる機会が得られなかった。そこで、ある程度音楽体験を持った学生達が(音=調べ) に対して持つ感覚とイメージについて調べてみた。

本研究では、この調査結果を分析し、学生達の音楽表現をより豊かにさせ、感性の育成に役立てる方法を考察するものである。

### I 領域「表現」とは

旧教育要領に示された6領域の扱いは、とかく小学校における教科目のように受け止められ、それぞれの領域で独立した指導が行なわれがちであった。

芸術的概念の強い分野である絵画製作や音楽リズムの2領域も例外ではなく、子どもの「生活とあそび」という視点は失われ、活動の過程を楽しませるといよりは、出来上りの結果を重視されるので、子どもにとって魅力のない活動となっていた。

子どもの心を見ない「教え込み」や「強制」といった行為が取られることは、人間形成の上からも、さまざまな問題が提起される。これでは、教育要領に示されるねらいの達成は到底叶えられるものではない。こうした背景から幼児期の活動は「その特性を踏まえ、環境を通し

\*名古屋短期大学

て行なうべきである」とされ、平成2年、教育要領が改訂されたことは、既に周知のことである。このとき「子どものあそびを通じた活動」として、絵画製作と音楽リズムが一本化され、その特色を明かにし、領域「表現」と称されるようになった。

「表す」ということは、外部刺激によって起こった心の動き（感情）が引金になって、そのことに反応し、具体的かつ形象的に行動されることである。つまり「かわいい」とか「怖い」「やってみよう」といった自己の内面（イメージ＝思考・感情）を何等かの手段（身体活動、絵、製作物、会話など）を通して外化（表現）することである。このとき教えられる「表し」ではなく、自分が感じたままの気持ちを素直に「表させる」ことが大切である。

表現指導に対する保育者の姿勢として求められることは、子どもの表現がつかないものであったとしても、その表現を認め、励ましや喜び、そして共に感動する心を持ちたいものである。豊かな内面の「表し」が育ったとき、それは創造へと発展していくことが期待される。

## Ⅱ 「音」と「調べ」

### 1 「音」とは

「音」とは、物の振動で起こる空気の振動、すなわち空気圧の変化が伝わる音波であり、人の耳に聞き取れる範囲のものをいう。なお、聞き取れない低い周波や高い周波の音もあるが、これらのことは、超音波と呼ばれている。好むと好まざるとに関わらず我々の周りに存在する音は、純音（倍音を含まない単振動の音）楽音（倍音を含み規則性があり、振動の持続がある音）そう音（規則性のない振動音）の3種類に分けることが出来る。音楽はこの中の楽音とそう音とによって構成され、その性質は音の高さ（周波数）強さ（振幅数）音質（振動の様相＝波形）の3要素によって決められる。とくに音質（音色）は、波形に含まれた倍音により決定される。この倍音とは、基音の振動数の整数倍の振動を持つ音のことで、基音とよく調和する自然発生音である。いわゆる、我々が音色として感じる音のことである。

### 2 「調べ」とは

「調べ」とは、いくつかの音が連なって出来る音律のことで、一般には、旋律とかメロディと呼ばれている。この「調べ」には、純正律と12平均律との2種類がある。ここでは、一般的な12平均律についてのみ触れることにする。

### 3 12平均律とは

1オクターブを平等な12音程に分割し、1音程の単位を半音と定めた音律のことである。任意の1音を基にして音高順に音を弾いていくと12の異なった音列が出来る。この音列のことが音階と呼ばれる。第1音（主音）となった音の名前がその音階の名前となり調と呼ばれる。また、音列の中に置かれた半音の位置によって、長音階と短音階に区別される。

長音階の構成は、第3音と4音、第7音と8音の間に半音が置かれる。短音階では、第2音と3音、第5音と6音の間に半音が置かれる自然的短音階と、第7音に上行、下行共に臨時に嬰記号が付けられる和声的短音階と、いま1つ、上行だけ第6音と7音に臨時記号が付けられる旋律的短音階の3種類に分けられる。

調の変わり方は、嬰記号が付く場合は、右廻りで（ト長調、ニ、イ、ホ、ロ、嬰へ、嬰ハ）の順で記号が増し、変記号のときは、左廻りで、へ長調、変ロ、変ホ、変イ、変ニ、変ト、変ハというようになる。短音階はすべて、長音階の3度下の音から始められる。なお、長調、短

音に対するイメージについて

譜例 1 長音階 (ハ長調)

ハ調長音階

譜例 2 短音階 (イ短調)

イ調短音階 自然(的)短音階

和声(的)短音階

旋律(的)短音階

(上行) (下行)

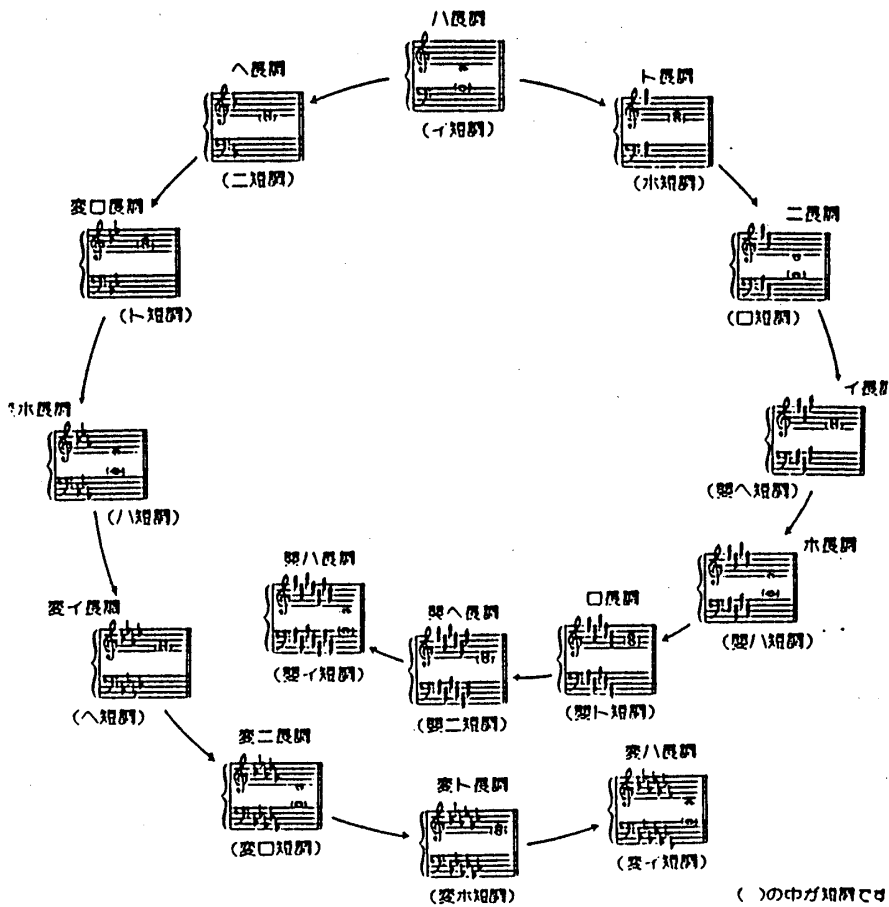


図1 5度圏

調ともに、変化記号の付き方によつて調の呼び方が変わる。また、始まる音は同じであるが、付けられている調号の違いで、呼び名が違って来る調もある。これを異名同音と言う。

これらの調に関わる内容は、理論の中で扱われるが、なかなか理解されにくい。そのためかピアノを弾く場合、調号の付いていない曲（ハ長調）もしくは、調号の少ない曲（ヘ長調、ト長調）を選びたがる。そこで、調に対する認識をいまま少し深めてやれば、調号が付いた曲も容易に弾くようになるのではないか。また、曲想に対するイメージを広げることも出来るのでは、という考えで、学生が好む調について調査してみることにした。

### Ⅲ 学生が好む調とは

#### 1 調査の目的

我々は、担当している「音楽的表現」の授業の中で、身体によるリズムカルな表現活動を経験させるが、その時にはまず、表現しようとする内容にふさわしい簡単な曲を用意し提示する。次いで、表現内容、表現技法に広がりが見られ出し、イメージが豊かに描けるように発展してくると、その動きに合った短い曲の創作をさせるようにしている。

今回は、この創作の折りに重要な役割を果たすと考えられる「調」について、学生が、どの程度の意識を持っているか調査してみることにした。

#### 2 調査方法

- 1) 調査対象 N女子大 58名 N短大 110名 計 168名
- 2) 調査期間 1993年6月、7月、9月
- 3) 調査方法
  - a) 授業の中で回答用紙を配布し、記入後回収する
  - b) 課題を与え次回の授業までに創作させ、提出させる
- 4) 調査内容
  - a) アメリカ民謡「メリーさんの羊」の調を変えて弾くのを聴いて、自分の好きな調を選ぶ
  - b) 簡単な詞に好きな調で創作する
  - c) 自分が好む調の既成曲に簡単な詞を付けて歌を作る

#### 3 結果と考察

##### a) について

表1-1・1-2で示すように両校の学生の多くは、原曲（ヘ長調）及び原曲に近い調が「好き」と答えている。その理由として「明るい、楽しい、かわいい、軽快」など歌詞から描かれる自分のイメージから選んでいた。また、上位5位までにあげている調は、いずれも「心よい、聴きやすい」といった安定感があるものを選んでいる。なお、この曲で調査した理由は「誰でもが知っていて、歌詞が付いているのでイメージが描きやすい」「リズムが単純で、付点が少ない」といった内容が、今回の調査目的にふさわしいと考えたことによる。

##### b) について

表2-1・2-2は、詞に自分の好きな調で創作した結果である。a)の結果、歌詞によるイメージが大きな役割を果たしていることが判明したため、創作曲にしても同様であろうと予想した。そこで「長さは8小節程度で、イメージが描きやすい詞」と決め、簡単な次の詞を課題として提示した。

提示詞「一度に咲いた 春の花 お庭が明るく くなりました」（絵本より）

作られた作品をみると、両校ともに「ハ長調」が圧倒的に多く、続いて「ヘ長調」であった。創作理由としては「明るい、イメージに合う、やさしい、かわいい」といった詞の内容の他に「作りやすい」という自分の創作力（技術面）をあげている。

また、a) の場合と異なり「変ホ長調」「イ長調」「ホ長調」といった変化記号を多く用いた曲は少なく、b) において「好き、感じがいい」といった自分の好みより、むしろ技術面が強調されていた。

要するに多くの学生は、a) のような「聴く」活動では、感性で受け止めているが、創作となると、好ましい調で作りたが技術的に出来ないというギャップがみられた。

この点を解消するためには積極的に創作の機会を与え、技術面を育てていくことが課題といえよう。

続いて技術面での欠落がみられたため「自分の創作曲を、もし移調するなら何調にしたいと思うか」と問いかけた結果が表3である。大部分の学生は2-3度程度の移調を希望していたが、なかには5度以上の調を示した学生もいた。移調することの意味を、正しく理解しているのだろうか、と疑問を感じている。

#### c) について

表4は、詞をつけるために選んだ好きな調の既成曲である。この場合、曲を先に選び、後から歌詞を付けるように指示したためか、手近かにある「マーチ」や練習を兼ねた「ピアノ曲集」の中から選

表1-1

N女子大

順位	調	人数	理由
1	G	16	・明るく、きれいな感じ(9)・軽快(5) ・歌詞に合っている(3)・聞きなれている(2) ・楽しい・落ち着いている(1)
2	A	8	・軽快(4)・明るく可愛い(2) ・優しい・落ち着いている(1)
3	F	7	・聞きなれている・明るい(2)・楽しく歌いやすい・自然・リズムカル(1)
4	D	6	・優しい・暖かい・心地よい・歌いやすい・落ち着いている・音の高さがよい(1)
5	E	5	・可愛く、歌いやすい(3)・明るく、爽やか・軽快(1)
	C	5	・安定感・聞きなれている(3)
7	Es	3	・安定感(2)・元気(1)
8	B	2	・優しい・可愛い(1)
9	As	1	・きれいで、可愛い(1)
	Des	1	・落ち着いた感じ(1)

表1-2

N短大

順位	調	人数	理由
1	F	28	・自然な感じ(11)・明るく楽しい(9)・軽快に跳び回る感じ(6)・安定感(2)・可愛い(1)
2	Es	22	・優しい(8)・やわらかい(4)・のどか・きれい(3)・明るい・可愛い(2) ・暖かい(1)
3	D	17	・明るく歌いたくなる・明るく可愛い(6)・暖かい(2)・柔らかい・楽しい・丸い感じ・音の高さがイメージに合う(1)
4	G	14	・明るく活発(5)・気持ちがいい(3) ・軽快で楽しい(3)・すっきり・可愛い・草原のイメージ(1)
5	E	10	・明るく軽快(4)・楽しい・たわむれている・のどか・歌いやすい・可愛い・スキップ(1)
6	As	6	・可愛い(2)・優しい・明るく楽しい・きれい・草原でたわむれている感じ(1)
7	A	5	・可愛い(3)・優しい・明るい・心地よい(1)
8	A	4	・明るく軽快(2)・可愛い・優しい(1)
9	C	4	・安定感(2)・素朴・聞きなれている(1)
0	B	3	・軽快・可愛い・子羊の感じ(1)
	Ges	3	・優しい・明るく楽しい・好き(1)
12	H	2	・無邪気(2)

んでいた。

また、曲に付けられた歌詞の多くは「マーチ」の場合「遠足、ピクニック、動物」といった軽快な曲に合う内容で「練習曲」には、調査時期にふさわしく夏休みの期待を秘めたレジャーに関する内容のものが多くみられた。学生にとって、歌詞をつけるということは「歌わされる」ということに結びつけたのか、自分の技量（音域、伴奏など）に合わせた曲が目立っていた。

今回の調査の結果、学生が好む調で明確になったことは、

- 1) 聴き馴れている。
- 2) イメージが描きやすい。
- 3) 自分で簡単に歌える、弾ける、創作出来る。

といった中から選ばれていることであった。そこで、参考までに授業の中で使用している「どもの歌」の調について調査したのが表5である。

この表が示すように、「子どもの歌」の多くは「へ長調、二長調、ハ長調」であり、学生達が述べている「聴き馴れている」とは、この辺りからきているのではないかと思われる。

さらにこれらの調は、音楽美学上から見ても、一般的に「素朴、常識、新鮮」といった人があり、これからも学生の好む調が当てはまると言えよう。

今回の調査をきっかけに、学生が様々な調に親しみ、少しでも調に対する意識を高めるように仕向けていきたい。そのためには、授業の中で行うミュージカルや身体表現活動に使用する音楽を、様々

表2-1

N女子大

順位	調	人数	理由
1	C	44	・明るくきれいな感じ(14)・歌しやすい(13)・落ち着いた(9)・作りやすい(7)・花の咲く感じ(1)
2	F	7	・詞に合う(3)・可愛い(2)・安定感(1)・花の咲く感じ(1)
3	D	3	・可愛い(1)・詞に合う(1)・清楚な感じ(1)
	G	3	・清楚な感じ(1)・安定感(1)・春の感じ(1)
5	A	1	・あかぬけている(1)

表2-2

N短大

順位	調	人数	理由
1	C	39	・作りやすい(21)・明るい(5)・イメージ(4)・素朴・語りかける・楽しい・歌しやすい(1)
2	G	23	・作りやすい(8)・明るい感じ(6)・この調が好き(5)
3	F	22	・イメージ(6)・作りやすい(5)・優しく可愛い(4)・調に合っている(3)・明るい(3)・この調が好き(2)・春の感じ(1)
4	D	21	・作りやすい(12)・この調が好き(6)・明るい(2)・イメージ(1)
5	Es	2	・作りやすい・イメージ(1)
6	A	1	・作りやすい(1)
	E	1	・楽しい雰囲気(1)
	B	1	・この調が好き

表3

N女子大			N短大		
順位	人数	移 調	順位	人数	移 調
1	15	C→G	1	18	C→G
2	13	C→D	2	10	C→F
3	12	C→F	3	9	F→C
4	3	F→D	4	6	C→D
	3	D→E		6	D→F
6	2	C→A		6	G→F
	2	C→E	7	5	G→C
	2	G→D	8	4	D→F
	2	G→D	9	3	D→A
10	1	G→E		3	F→G
	1	A→G		3	F→D
			12	2	G→D
				2	D→G
			14	1	C→E
				1	C→Es
				1	C→As
				1	C→A
				1	G→E
				1	G→Ges
				1	G→Es
				1	F→Es
				1	F→A
				1	F→E
				1	F→Des

表 4

既成曲名	N女子大 N短大	
	人 数	人 数
ピアノ練習曲	34	13
マーチ	6	29
表現活動曲		47
フォークダンス		24
ピアノ曲集	18	

表 5

幼児歌曲集	子どもの歌200
F 60	F 74
D 34	C 41
C 25	D 34
G 19	G 16
E 6	B 7
B 6	Es 7
Es 5	
A 3	
その他 13	

なジャンルに広げ、音楽の持つ美しさや楽しさを、豊かに感じる心を育てる授業が展開されるように努めていきたいと考える。

### お わ り に

我々の身边は、様々な音環境で取り巻かれている。その音の中には、一瞬、心を奪われるような快い音もあるが、雑音としてしか受け止められないような、やかましい音もある。

子どもは、快い音も、そう音も、同じ音として受け止め、いろいろな発想をもち、それを巧みに、遊びごとへ結び付けていこうとする素質をもっている。そこで、保育者は子どもの年齢発達に応じ、適切な音環境を整え、感性の育成に努めるよう配慮しなければならない。

この音環境とは、楽器で奏でられる音楽はもちろんのこと、保育者の歌声、ほか様々な楽音のことを指すものであるが、ときには自然な風の音や虫の鳴き声、川の流れなどに耳を傾けさせ、心に浮かんだ情景を何等かの方法（絵、会話、身体表現、演奏など）に託して、表現させたいものである。この場合、大人の感覚で考えられた活動内容を押し付けるのではなく、素直な子どもの考えや行動を大切にしていくことが肝要であろう。もし、表現の方法や手段が分からない子どもがいたとしたら、ヒントを与える意味での模範演技をしてみせることは必要であるが、それをそのまま真似させることは、出来るだけ避けたいものである。しかし、年齢が低い場合は、模倣することによって表現の方法が認知されていくので、保育者は出来るだけ多くの表現（技）に熟達し、子どもの心に感動をもたせるものでありたい。保育者こそ、芸術的活動の全てが堪能であって欲しいと願う。しかし、それは恐らく無理なことであろう。そこで、指導者としてこれだけは磨いて欲しいと願うのが「感性」である。感性とは、日本語大辞典によると、心理学的説明として「外界の刺激を受けて、それに対応する感覚内容を纏める働き」としている。また、哲学的には「悟性とともて認識能力を形つくる心の働き」であり「直接見聞きする主観的認識と理性によって整理された真の認識で、現象界がその対象となる」と説明されている。

情操教育の一端を担う音楽は、全ての点で子どもたちの生活の中にあり、感性の育成が最も容易である。それだけに、対応する人の感化や、取り扱われた教材の影響を受けやすい。

今回行った調査から判断すると、学生が好ましいと思う調性が「ハ長調、ニ長調、ト長調」そして「ハ長調」と、かなり限られた調になっているので、一般的に使用されている子どもの歌曲集で収録曲の調性を調べてみたところ、学生の好む調と収録曲数の調の上位が一致していた。また、好む理由を聞いた「何故か」に対し「聞き馴れているから」と答えているのは、恐らく小さいときから、こうした調性曲に触れる機会が多かったからであろうと思われる。

これらの調が好んで使われる理由は、子どもの声域発達に起因するものが大であるが、いま

1つ、指導者側の演奏技量（調性を表すシャープやフラットの記号が少ないため、歌い易い、弾き易いという感覚をもってしまう）からでもあると思われる。

「豊かな感性を」と言いながら、一番感覚力が育つ幼児期に、いつも同じ感じのする音楽教材を与えていることは、1つの枠の中にはめ込もうとした傾向が伺える。指導者側の技量不足からくることなのか、バラエティに富んだ教材の不足からなのか、真に残念なことである。

我々は、自分が担当する科目「表現」の授業の中で、様々な活動経験を通し、学生の感性を育み、さらに音楽に対する知覚や創造力の育成を目指した指導をしていると自負していたが、今回の調査結果を踏まえると、創作力、とくに調性感の育成に欠落があったように思われる。それは、作品を作ったときの気持ちを説明する文の中では「悲しい、静かな、優しい」と言った言葉が使われているのに、明るい感じの調で作られているのが目立っていたからである。また、そうした学生の曲を移調奏していくと、短調になったとき「快い、自分が作ろうとしたのはそれだ」と訴えてくる。要するに「聞き分ける力」はあるが「作る力」は無い、ということであろう。今後、努めていろいろな調性に接させ、情景のイメージと合致した調で創作出来るようにさせたい。そのためにも、基礎である楽典の理解を十分にもたせたいものである。時間の不足は、器楽、声楽の中で復習的活動をして補うことも考えられる。

## 要 約

子どもたちの表現活動を「豊かにさせたい」と願うならば、当然、人的環境である指導者自身の表現力が問われることになる。内面的、主観的なもの（自己の心に描かれた思い）を何等かの手段に託して表出するということは、演技力もさることながら、自己がもつ感性とイメージする力に支配される。従って、教員養成校の学生にとって大切なことは、あらゆる場合、臨機応変で、しかも素直な直観的行動（イメージする力）が取れることであろう。

イメージの育て方は、絵画をはじめ多岐に渡るが、今回は子どもの生活と切り離すことのできない音楽活動（調性嗜好）を取り上げ調査してみた。

イメージの育成に関しては、技術の優劣より直観的発見とそれを如何に表現するかの力量に掛かって来る。

今回の「調べ」についての調査は、一応、最低線の楽典が理解されている学生がもつ、内的感情を素直に表現させる素地を作ろうと試みたものである。2大学の学生で領域「表現」の授業を取っている者168名を調査対象とし、指導者の移調演奏するアメリカ民謡「メリーさんのひつじ」を聴き、好みの調性をえらばせることを手始めに、既成の詞にメロデーを付けたり、既成曲に合う作詩をさせたりしたものから、学生の好む調性を知ろうとしたものである。

我々は、今回の調査結果で学生に不足している諸々を発見した。今後の授業方針として、この結果を踏まえ、調性の理解が深められる内容を盛り込んでいきたいと考える。

## 参 考 文 献

- 1 金田一春彦監修 1989 日本語大辞典 講談社
- 2 大給正夫監修 1944 楽典（基礎と応用）音楽之友社